

土曜市民セミナー

「北海道大学総合博物館・北海道大学スラブ研究センター共催

シリーズ「知られざる北の国境」第4回

二〇一〇年二月六日

北海道大学総合博物館一階「知の交流」コーナー

『浮游する樺太』

講師 工藤信彦

講演要旨―補足しながら主旨を記してみるならば―

グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界

2009年度 後期
道民カレッジ連携講座

土曜市民セミナー 共催
北海道大学総合博物館
北海道大学スラブ研究センター

シリーズ「知られざる北の国境」第4回

浮游する 樺太

講師
工藤 信彦
(社団法人全国樺太連盟理事)

樺太とは何だったのだろうか。樺太の歴史は、一冊の通史も無いだけでなく、鳥で生まれ育った私にさえも樺太が見えないということである。戦後六十余年が経つ現在、樺太をトータルに語り得る人は、もう何処にも居ない。知らない人は、故郷としての樺太を語ることは無い。故郷は知識ではない。一人一人の記憶が樺太、浮游とは記憶のことである。波が海の表情でしかないように、記憶だけが北限の岸辺なき海に漂っている。

日時
2月6日(土)
午後1時30分より

会場
北海道大学総合博物館1階
「知の交流」コーナー

入場無料 | 事前申込不要 | 定員60名
*定員を超えますと立ち見となる場合がございます。
あらかじめご了承ください。

講師: 工藤信彦

本セミナーに関するお問い合わせ先
北海道大学スラブ研究センター「境界研究の拠点形成」事務局
tel: 011-706-3314 | mail: gcoe-jimu@slav.hokudai.ac.jp
http://borderstudies.jp

北海道大学総合博物館
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 tel.011-706-2658/3607
http://www.museum.hokudai.ac.jp/activity/seminar

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM

アクセスマップ
イチョウ基本
北13条門
北12条門
JR札幌駅
JR札幌駅
北10条通り
正門
南門
図書館
展示館
中央食堂
総合博物館
農学部

博物館からのお知らせ
12月18日より、総合博物館2階に日露国境碑石をばし結ぶ北の国境にわかる資料を展示いたします。どうぞお立ち寄りください。

卒業して五十六年ぶりの母校で講演をさせていただいた。講演や講義は十分馴れてきたとは言っても、結果として思うことは、やはり、時間的な切り換えや要約力がスムーズに働かず、もともとの話題の過剰さがどこかで独走して、散漫となったのは否めなかった。リタイヤして十七年経つからやむをえぬか、とも思う。スライドの機器を使いこなせなかったことも致し方なかったが、聴いて下さった方々に申しわけなく、また定員の二倍半という方々で、スライドが見えない場所の方々が多かったのに、その方々への配慮まで気が廻らず、これも申しわけなかったと思っている。

内容に入る前に、お断わりして、私にとって樺太が生地であるとともに〈ふるさと〉であると思っていることを少し話した。一九六五年に上京して以来出会ったことの一つに、東京生まれの若者が挙って〈東京にふるさとが無い〉と言いつけることがある。小林秀雄の「故郷を失った文学」などを片手に、故郷論をよく語ってきたのだが、生地イコール故郷は、郊外団地族の登場によって、当然のように壊滅している。そんなことを念頭にしながら、かつての犀星詩の研究者として、彼の〈ふるさととは遠きにありて思ふもの〉を引いた。三十年間、ほとんど金沢に帰らなかった室生犀星は、ふるさととは、〈遠くにありて思ふもの〉でしかありえなかったということ。出自もあるが、彼一流の、いかにも田舎者らしいプライドのなせる姿勢であった。詩人の中で、彼ほど計算高く合理的でありながら泥々（どろどろ）とした土着の匂いをもつ、極度にシュールな詩人は居なかったというのが、私の実感である。ふるさとが〈遠きにありて思ふもの〉とは、言うなら、犀星の覚悟の表明である。だからこそ、娘の朝子さんに言わせると、舌の肥えた美食家犀星の日々の食材は、ふるさと金沢のものに限られていたと。彼にとってふるさととは、日々の舌が感じる最高の美味でもあった。私はその話をして、私にとっての樺太は、今日の私を育ててくれた、実に豊かな生地である故に、今、遠くから味わっている〈ふるさと〉であると話したつもりである。そのかけがえのないなつかしさと、充実したかつての日々の中に、もちろん悲劇も含めて、あたたかくみつめ、書き記していききたいといまは願っていると。そんな気持ちを、先に伝えておきたかった。

ここから本題に入った。今日の話のアウトラインを紹介した上で、極めて課題の多い日露戦争最末期の樺太占領の説明に入る。講演では説明しきらなかったことも多かったのですが、補足しながら、私の意図した内容をここで書いておこうと思う。私の作成した「樺太占領略史」をみなさんに配布し、それを資料に説明する。

講演では紹介出来なかったが、岩波新書「原田敬一著『日清・日露戦争』」の中の「ポーツマス講和」の項の記述は、樺太占領の不思議を端的に示している。ポーツマスでの講和が、十七回の本会議が行なわれるという事態となった最大の対立は、日本政府からの賠償金の請求と樺太の割譲とであった。しかし、八月二十八日、日本の御前会議と閣議は、〈たとえ償金・割地の二問題を抛棄するの已むを得ざるに至るも、この際講和を成立せしむること〉という公電を小村全権に打っている。樺太も要らないから早く講和をせよ、と。

ところが、同日、たまたまイギリス公使の仲介でロシア皇帝が樺太南部の割譲を認めため、翌二十九日に合意し、九月五日の調印になっている。もし、天皇裁可の小村全権への公電が、一日早かったら、樺太は誕生しなかったことになる。じゃあ一体、この樺太占領は、いつどこでどのように企画され、実行されたところなのか。

この樺太作戦の提案から実行に移すまでの経緯も、正直、驚くことの方が多く、歴史として見直す必要がある。事の発端は、時の大本営の参謀部次長の長岡外史少将である。樺太が手薄な状況をよく知った上での樺太占領作戦は、前年の内から長岡次長が提案をするが、莫大な戦費を使っているとして、その余裕が政府になく、というより、山県有朋参謀総長はもとより、寺内陸相、山本海相が反対であった。サプライズは日本海海戦の思わぬ大勝利で、六月十七日天皇裁可、七月四日、第十三師団の樺太への青森大湊港からの出港という、慌しい作戦開始となったのである。七月七日の上陸からその月の三十一日の島の完全制覇、実動十五日間ほどのあつけない戦闘勝利であった。私が樺太連盟に来て驚いたことの一つに、元理事や主たる会員、樺太研究者を自認する樺太生まれの人たちの中に、この樺太占領は無かったとして、樺太は、ポーツマス講和で平和裡に領土化されたと信じている人や、「樺太占領」というもの言いを間違っているとして私に訂正を命じようとする人が居ることであった。背景には、靖国神社の遊就館の日露戦争パノラマが、日本海海戦で終わって樺太占領が全く記録されていないことがあり、現在店頭にある『もう一度読む山川日本史』にも話題の『新しい歴史教科書』にも全く書かれていないという現実もある。先の原田の岩波新書ですら、〈その間に日本の意図した樺太占領は終わり〉の、この一行の叙述しか記されていない。そのためにか、サハリン島から三万人ほどの島民が大陸へ引揚げたことなど、記されることは全く無い。日本軍の七十五名の戦死者の慰霊はどうなっているのか。

この長岡次長による思いつき樺太作戦の経緯は、谷寿夫著『機密日露戦史』に詳細に記されている。谷大佐が陸軍大学校で講義したものの出版で、最も信頼のおける資料である。樺太占領が、歴史からはずされているのは、この思い付きと偶然で終わった戦闘であったからであろうか。私は、「略史」を利用して、講和以前の、つまりロシア領に、軍や道庁が、規則を作ってどんどん渡島させていることを、さりげなく説明しておいた。これが領土侵犯に当たるとは歴然だと私は思っている。

「樺太は浮遊」――最初、私がここで話そうと思ったのは、実は現行地図の不可思議であったり、私の著書のサブタイトルとなっている、〈外地であり内地であった〉の〈浮遊〉であった。しかしこれは、私が本に書いたことであり、もう少し専門的に考究する必要がある、と同時に、極めて今日的な政治課題と切り結ぶ点のあることを十分思うので避けて、もう少し一般化を心していったプロセスがある。なぜ樺太占領が記されないのか。昨年出たすぐれた日露戦史、山田朗著『世界史の中の日露戦争』ですら、ポーツマス講和を説明する中に、〈日本軍はすでにこの段階で樺太占領の既成事実を作り〉の一行でまず紹介し、

さて、私は、「樺太占領」にまつわる話題をあと二つお話した。新聞報道の不思議と、渡島者の誕生という二つである

一つは渡島者の三分の二を占める北海道民。当時北海道で発行されていた新聞三大紙に、この樺太占領がどう報じられていたかということである。日露戦争によってサハリン島周辺の漁は禁止されていたから、海馬島を基地とした密漁は公然であり、明治三十八年の一月から八月までも、二百艘の三半船が往来したと新聞は伝えている。七月四日に大湊（青森）を出航した五十九隻の樺太作戦大船団。七日のメレイ上陸まで、津軽と宗谷の二つの海峡を渡っている。北海道民たちには、待ちに待った樺太占領であったから、十分に情報は伝わっていたろう。ところが、当時の三大紙の、明治三十八年四月から九月までを隈なく調べた結果わかったことは何とも不思議である。第一報は、七月五日の「北海タイムス」二面の二段目に、六行の記事で、〈薩島の天候回復・快報近し・同島の敵兵数四千〉とのみ報じる。次ぎは八日の「小樽新聞」の二面の中央に囲みで、〈薩島占領の公報接せば、本社は三発の煙火で急報〉と記す。四行でゴチ活字で大きく。この二つのみである。〈樺太占領〉の陸軍公報が、三紙同時に初めて紙面で報じられるのは、七月十一日である。これが、道民十分承知の樺太占領の新聞報道の実態である。表面上は、極秘の軍事行動という形をとっている。日露戦争はメディア戦争と言われ、「戦果・戦死者・美談」を主にして、新聞各紙はそれぞれ従軍記者を中国本土に派遣し、人々は挙って新聞を読み、戦勝を祝った。「報知新聞」は、戦前九万部の部数を戦後は三十四万部に伸ばし、大阪毎日、一日に三回号外を出し、博文館は、日露戦争開始三日目から、月三回の「日露戦争実記」という雑誌を発行している。速報性こそが競われ、新聞に写真が載るのも、この時からである。樺太占領のこの極端な軍の報道規制は奇妙きつである。従軍記者の同行も禁止して民間人は唯一人函館の衆議院議員内山吉太氏を乗船させ同行させている。氏はサハリン島の〈水産漁業組合長〉であった。すべての原因がここにありとも見えるし、事実、「北海タイムス」が、内山氏を名指しで指弾している。サハリン島の漁業権をめぐる暗闘は十分に想像つく。三島由紀夫の祖父、樺太三代目長官平岡定太郎受難の大騒動の発端もここにある。しかし、この北海道三大紙の樺太占領の不可思議を示しただけで、それ以上に言及はしなかった。講和の有利な条件づくりのための極秘作戦樺太占領。軍は一刻も早く占領統治をすすめようとし、国民は一刻も早く渡島しようとする、新聞は樺太領土化を大々的に報じてゆく。どこにも、領土侵犯の思いは記されていない。樺太は本来わが領土という国民感情が、三大紙の紙面に踊るのは、日露戦争開始と同時であった。

私が語ったもう一つの話は、それではどんな人たちが、戦後樺太に渡ったのかということである。私の関心はもともと日露戦争になかった。樺連に非常勤で出るようになると同時に調べ始めたのは、この〈樺太に渡った人たちは誰か〉という問いである。樺連が発

行する『樺太年表』の明治三十八年八月十六日の項にある（日本郵船（株）田子浦丸、樺太定期航海のため小樽を発す）の一行が、何とも不思議であった。講和もならぬロシアの島へ（定期航海）？ということと、なぜ（入港）でないのか、と。『樺太沿革行政史』を始めとする、見うる資料に当たり、日本郵船の百二十年史など、ずい分当たったが、みなまちまちで根拠なく、わからずじまいであった。二〇〇六年六月末、年に一度もない札幌行、北大恵迪寮の同期会終了後、一人ではじめて江別に北海道立図書館を訪れ、樺太の資料をコピーしている時、館員の方から見せられたのが、当時の新聞に載った田子浦丸関係の記事の拡大コピーであった。その中に、田子浦丸第一船の乗船者名簿の載る八月十八日の「小樽新聞」二面の「樺太初航の田子浦丸」という記事があった。雨の中、その新聞記事を靴に入れ、なぜか身ぶるいがし涙が流れたのを覚えている。そして同時に新聞を調べればいいのだと気づき、リタイアして長くなったことで、調査の基本も忘れていたかと悔んだものである。それから何度も国会図書館に通い、マイクロの拡大コピーを百六十枚ほどとってきたらうか。ついでに、旅順で戦死した祖父のこともあつて、「日露戦争実記」も、半分以上はページを繰ってみた。

はやくから、堀江満智著『ウラジオストックの日本人街』などを通して、ロシア社会に日本人がどういう形で入りこむかを読んできているので、流刑の島とは言え、政治犯の多く居たというサハリンの社会を少しは想像出来たから、渡島者の夢見た生活環境への興味は前からあった。根拠となる資料を手にしたので樺連の書棚に眠る資料を改めて探索しつつ、また、樺太研究者の竹野学君の協力もえて、たとえば、日露戦後の大連の都市造りも調べたりしていたので、時間はかかったが、田子浦丸の初航記事に端を発した、私の言う（島民の誕生）探求の諸々は、かなり明らかになったと思っている。（定期航路）の意味も、田子浦丸入港の日時なども、新聞三社を通して私なりの判断はしている。

こうした背景に基づいて、私が講演で話した「樺太占領」三つめの話題は、札幌とは異なる、樺太における都市社会の誕生ということに向かった。『外交文書』から、明治三十八年十二月末現在の在島者職業一覧表を知り、その中に（点燈夫二人）とあることに興味があった。サンテグジュペリの『星の王子さま』をすぐ思い出したが、この仕事何だろうと思うのみであった。それが判明したのが、博文館が明治三十八年七月二十五日に発刊した『樺太写真帖』の中の一枚の写真であった。占領軍上陸時にロシア軍が火を放ったというコルサコフ（大泊）の街の、焼失前の街並みの中の、立派な街路灯の写真である。注意して他を探して、樺太占領南部軍の竹内司令官が書く（百十戸ほどが住む農牧地）のウラジミロフカ（豊原）にさえ立派な街路灯のあることを知る。日露戦後、三十九年に樺太で最初に酒造りを始めた小森商店の息子さんの小森良彦さんは、家にガス燈があったと話される。（点燈夫二人）の意味もわかると同時に、樺太にはすでに、ヨーロッパ仕込みの都市文化が、それなりに栄えていたことを初めて確認したのである。そして、毎年七、八千人のやん衆がサハリンで季節労働者として滞在しているから、島の街の様子は十分に知り尽くしていたと考えられる。本来植民地が、統治のため行政機関が集中する都市の開発から始

めるのは、札幌とて同じこと。樺太を語るのに、豊原が語られないのは、私たちの同世代者は当時子供だから豊原を知らないということも一つある。樺太連盟の現理事中豊原在住者は二十一人中三人、ほとんどが地方出身者である。昭和五年に豊原に自動電話が引かれていることでもわかるように、豊原は、植民地の都市らしく十分に洒落て文化的で、生活水準も高かったのである。日露戦争後の渡島者の職業一覧は、まさに商業都市の生活者を夢見た人たちが占めていると思ってしまうまい。流刑者の島というイメージから、文化文明の後れた島として、暗い苦闘の島のイメージで語られていることの修正が、今回の私の話の一つの意図でもあった。だから、何枚ものガス燈の写真をお見せし、明治四十二年のマウカの街の町名が花シリーズであった市街図と、私がカラー化してみた、吉田初三郎の作かとも言われる豊原市の昭和十三年頃の鳥瞰図、そして現在のユジノの航空写真をお見せして、樺太を豊かな生活文化の島として見てもらうよう心してみたのである。敗戦時の悲劇のみで語られる樺太の貧しさは、あまりにも淋しい。私が樺太でペチカの官舎で生活している同じ時、ランプで避地の厳しい生活をしてきた人たちが居られたことも、十分知っている。どちらも樺太である。悲劇を悲劇のみで語っては喜劇にもならない。国家の樺太放棄をせずに心豊かに充実した日々を過ごしていたことこそ、言うなら悲劇だろう。歴史に記録されることもほとんどなく、極秘の思いつき軍事占領で日本の領土となり、大連と比較してもほとんど国家投資もなく、ついに地方議会も置かれず、南洋庁並みの樺太庁として、わずか四十年で終わった樺太。そこが私の生地である。なぜか樺太の人も樺太を記さずに過ぎたのが、私の故郷である。不思議な土地で生まれ育ったものよ、と、しみじみと思うとも話をした。

以上で「樺太占領」の紹介を了え、ついで北緯五十度の国境について語った。この講演の話が岩下さんからあったのは、七月であったと思う。あれこれ散策しながら十月頃は、テーマに合わせて、かねてから読み、関心のあった志賀重昂の『大役小志』を解体し『樺太境界劃定事蹟』を援用して、北緯五十度の線国境策定作業の紹介をしようと考えて、アウトラインをいろいろ考えてきた。しかし国境とはを問えば問うほど、戦争の結果としての線分作業のありようが問われるべきであろうと考えるようになり、結局は、知られざる「樺太占領」をメインとして話すことにした経緯がある。

北緯五十度の国境を考える時、前提となるのは、ポーツマス講和第九条にある、両国共に国境を挟んで軍事工作物を築造すべからずという条項である。私の心にあったのは、初めて樺太を史の視点で読んだJ・J・ステファンの『サハリン』の中で書かれた次のような文章である。こう書く。(境界線は北緯五〇度線に沿って冷たい一本の線となつて) (森をつき切つて理性を失つたかのように突走つていた。)と。北大出版会刊『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』に書いた「国境幻想」というエッセイで丁寧に書いてあるが、フランス・アルザス地方に一年住んだ体験で、この唯一の地続きの国境を、いかに人跡未踏の森林地帯とは言え、杉本・岡田の無謀な恋の逃避行とソ連軍の侵攻のみで語るの

いかにも貧しい吉説という認識をもっていた。さらに樺太連盟に来て、敷香で生まれ育った同世代の、杉本・岡田事件によって日常生活が一変し、いわば警察国家となってしまったことを、今なお激怒し、杉本・岡田事件を決して許さぬと語る人々の居ることも知った。なぜいまもロマンで語られるのか、と。大江志乃夫の『日本植民地探訪』さえ、この事件を懐旧の思いで回想している事がある。ここをどう解き放つか。時間をかけたところであった。探し求めたのが、観光地国境を訪れた家族写真であり、それに気付いたのは、神沢利子さんの童話『流れのほとり』であった。

講演のスライドで使ったのは、道連の事務局に頼んで樺太関係資料館の資料の中から届けてもらった写真である。上手に使えなかったのは残念であったが、安別の第四号標石に坐る三人の少女の写真は、私にも鮮烈であった。小学五、六年生の遠足写真にしる、真岡町民の商店主たちの観光写真にしる、北緯五十度の国境標石を、私が豊原で、博物館前庭の標石のレプリカを裏表撫でて遊んだと同じ感覚で、標石を中に写真を撮っている。しかしこれが、昭和七年から十二年までであることも意味がある。杉本・岡田事件が昭和十三年の一月である。以降、初めて国境に警察の警備隊が置かれ、警戒が厳重になったのである。杉本・岡田事件は、敷香の街の人たちに、国家がスパイ容疑をかけ、徹底した家宅捜索をしたり、警官を首にし、旅館の営業を停止するなど、いわば生活破壊を生じた犯罪であったということである。当時の日本の思想や芸術の社会での極端な閉塞状態からの彼らの夢想はそれなりの役割りをもったにしる、なぜ国境が、生活する者の目線で論じられ記録されることが無かったのか。私には何とも不思議に思っていた。

実は当日、もう一枚の写真をお見せしなかった。それは、北海道新聞に載った、北大博物館の三人の美女たちが、博物館二階に展示している第二号標石の実物をつめて写っている写真である。彼女らはまさに、標石を見ている。しかし、三人の少女と標石を写した写真は、彼女らが標石と共にある自分たち、三人の全体を見ている、と話したかったのである。国境を喪った日本という国家。国民は誰一人、国境が地上の線として存在していることを知らず、海の中のロマンとして、権益として、条文としてしか認識してない。いわば標石を他者として、無縁なものとして、古代の遺跡を見るようにしか見ていない。三人の美女たちの眼に映る標石こそ、その見方こそ、かつての私自身を含め、今日の日本人一般の国境観と見たい。それに対して、三人の少女の写真は、国境と共に在る、親しみつつ共生し合う生活者の目がそこに在る。アルザスで知ったヨーロッパの国境はそうであった。日常は共に親しみ合い、一旦戦争が始まると、そこは敵対する修羅場になるという。私たちが樺太で、平和に豊かに暮らしていたのも、実はあの北緯五十度の国境があったからとも言えよう。あの三人の少女たちはいまだどうしているか。八十の中半だろう。と。

もう一つは、志賀重昂の『大役小志』を少し紹介しながら話した、〈直線としての国境〉ということである。全長約一三二キロという、見事な線国境を、策定事案の委員長大嶋少将の提供になる国境地図でまず示してみた。榎本武揚が「はしがき」を書いた『樺太地誌』

からの資料である。そして、陸軍省の『樺太境界劃定事跡』も心にしながら、見事なほどの国境を二枚の写真で示してみた。一つは「林空」、一つは「塹壕」と記された写真である。厳寒の五十度線、夏は二ヶ月半、四十度の暑熱の中で一気に直線に伸びて、四十メートルの大木になるが、冬はマイナス四十度。大地は凍土だから根は浅く、倒木が大量に出る人跡未踏の森林に、日露双方で協力して作った北緯五十度の線国境。その涙ぐましい努力と、両国人の交流、何よりも、シームレスの大地に国境をつくることのナンセンスさも含め、志賀の日記は実に楽しい。いつかそれをまとめてみたいものである。私の心をとらえたのは、北緯五十度の国境劃定の作業を「林空」と名付けた、この言葉にある。二〇〇二年初めて訪れた時の、草に埋もれたただの林道を、改めて思い出し、翻訳語としても深みのあるいい表現だと思っている。

私がここで話したのは、国境が線であるということであった。半田沢を通る一本の道に置かれた警備派出所に駐在した人の眼を、かなりの越境者が容易に掠めて通っていることが記録されている。あのタイガとツンドラは無理としても、本来国境は線である。時系列でみても、杉本・岡田事件とソ連軍の越境でのみ国境を語るのも、点であろう。時間の流れでとらえる歴史を無視した見方しかあの国境がとらえられていない。まして、先住民たちの国境の利用や、隔週に交わされる郵便物の交換所があったことなどの日常が知らされることはない。それは変だろろうと思っていたのが、私であった。

ここで、東京を発つ前夜、最後のまとめと書いて書き記した国境観のメモをそのまま書き写してみよう。語り言葉はどうしても散漫に流れるので。私はこう書いている。この時、岩下明裕教授の国境論の解説と、杉田敦著『境界線の政治学』の二つの論稿を頭に置いている。

『国境』は本来、在るものではなくつくられたものである以上、可変なものと考えるべきである。私はいま、こう考える。「国境」とは、シームレスな地表に、国家権力が意図的に線分化することで機能させる、コンタクト・ゾーンである。当然のことに、国民は国境によって境界化を強いられることで、二分化された住空間の種々の変動は避けられないし（引揚げもその一つ）、その責任は、本来国家にある。しかし、〈線分〉が、個々の国民の合意に基づかない、非民主的な権力の行使である以上、そこに生じる〈責任〉を国家がとることもない。三人の少女の写真が示すような、生活者の眼で見る国境観を喪ってしまったのは、「国境」は、ますます国家のものとなって、国民のものではなくなってしまう。サンフランシスコ講和条約で北緯五十度の国境線を自ら放棄してしまった以上、杉田の言う〈国境の相対化〉さえ存在しない国家となってしまったのが、日本という島国である。せめて、唯一の地続きの国境を体験した樺太で生まれ育った私たちで、あの国境の意味したもの、また国境が島民の日常にもたらしたものを見直し、記録してゆくことを果たすことで、もはや無いにしても、「国境」あつての領土、国家であること、今後の糧としておきたい。それが、私たちの責務のような気もしている。いたずらに敗戦時の戦争の悲劇の情に埋もれていても、〈樺太〉は、歴史に名を止どめることには

ならないであろう。「国境」とは、私たちの日常生活の中の足元に、一人一人の足元に引かれる一本の線である認識を持つよう。

こういうことを果たして話し果たせたかどうか。「三人の少女」から「三人の美女」への変遷の中に、戦後から今日の、特に北朝鮮の拉致問題の対応に見られる日本の孤立化の様相を思うのは、私だけではなからうと思っている。〈相対化〉とは全く逆の姿勢がほの見える。沖縄の現状を、日本国民はいつたいどう見ているのか。国境の内外という意味でも、極めて本質的な課題を示していると思うが、国境観でこの問題が論じられているのかどうか。湾岸戦争以来の新しい帝国主義の課題にもつながろう。私には、北緯五十度の地続きの国境喪失は、その意味でも大きな損失と思える。と同時に日本という国は、あの国境を国境としてはたして認識していたのかどうか。単なる軍事境界線でしかなかったのではなにか。問うべきことはまだまだ多い。そんな思いで、「国境」の話をしていた。

講演では、最後に、「樺太引揚げ」の話をした。〈樺太引揚げ者〉と一括されることへの異議申立てをすると同時に、「樺太引揚げ」が、〈内地から内地への引揚げ〉という論理矛盾を内在することで、満州引揚げなど、他の引揚げとは全く異なる課題をもっていることを紹介しておいた。『わが内なる樺太』に書いたことを踏まえてである。

はじめに、ユジノサハリンスクの公文書館収納の、「樺太引揚げ者乗船者名簿」の一ページのコピーをスライドで映して説明を始めた。これは、若い樺太研究者竹野学君が、昨年三月六日夕刻、外交資料館での資料調査の過程で私に報告してくれたことで初めて知った事実である。彼の報告は、外交資料館のマイクロの中に、この乗船者名簿が九年前からすべて収まっていることを知ったということであった。彼は一昨年の十一月のユジノ滞在中に、この原簿二〇八冊を公文書館資料で発見していて、スライドに使ったのは、その時の彼の撮った写真の一枚である。樺太の人口統計が、昭和十六年末で終了し、敗戦後の一斉消却で戸籍簿もない状況の中では、この、ユジノにある二〇八冊の乗船者名簿こそ、貴重な第一級資料である。この乗船者名簿は、戦後の米ソ協定で実施された正規引揚げ者のもので、すべてロシア語で記され、渡島時期から賞罰の有無に至るまで十項目、一人一人に記す記録で、二十九万二千五百九十人分の名簿である。外交資料館の資料は、その簡略版となっているが、全員のものがあると言う。マイクロ一万二千コマあるとのこと。

この資料が私に語りかけてくれたものは極めて重い。加藤陽子がかつて中国引揚げで書いたように、敗戦後の〈引揚げ〉は、敵国の協力によってほぼ完璧に行われた、と。昭和二十一年の十二月から第五次にわたる樺太引揚げ。帰国を希望した日本国籍をもつ者は、全部帰国したと言われるこの引揚げ。その氏名が全部記されて残っている。しかし、敗戦時、全くの泥縄にしろ、緊急強制疎開という樺太庁命令によって、内地樺太から内地の、北海道や本土へ引揚げさせられた者は、密航という自由渡航者を含めた約十一万人というが、その〈強制疎開者〉の人数も氏名も記録してはいない。私はこれを皮肉などと言えないなあと思っている。昭和十八年四月からの、島民全体の意志に反して強引に内地へ編入

させて、一切の記録を放棄した国家意図のなせる業。言うなら無念というしかないこの樺太放棄こそが、実は、調べることで知る植民地樺太。石風社の福元満治さんが私の本のサブタイトルとしてくれた〈外地であり内地であった植民地樺太〉の、見事な証明であった。

〈樺太放棄〉という言葉は、講演では一切使わなかったつもりである。ただ、著名人で故人だからと断って音楽家広瀬量平君の名を挙げ、以上三つの分類「一、強制疎開、二、自由渡航、三、正規引揚げ」のほかに、「四、早期退島」という人たちがかなり居ることを紹介して、話を了えた。それは一九四四年八月八日の最高戦争指導会議事録中、敗戦前の対ソ連との和平工作の条件の中に、〈樺太返還〉が明記されていることの結果である。ほとんど持物なく疎開させられ、八月二十三日最後の宗谷丸は、定員七九〇名に四五〇〇人乗せたときの船長が、『稚泊連絡船史』の中で回想している。だが、早期退島者は、政府の樺太放棄をいち早く知って、全財産をもって本土に帰国している。私はこれを含めて「樺太引揚げ」と言っただけで、早いと主張してきた。これが歴史的事実である。豊原中学二年生の一年間だけ居て札幌一中に転校していった彼は、七、八年前、東京での札幌南高校の同窓会で会って話した時、〈国家が捨てた樺太に長く居ることは無いよ〉と事も無げに話していた。今、樺太、樺太と言っている人の中に、この早期退島者が、結構居ることも書いておこう。

「浮游する樺太」と題して、〈浮游〉を説明することなく講演を了えたが、みなさんの心にどう届いたろうか。北大スラ研で作っていたいただいたチラシには〈記憶こそ浮游〉と書いておいた。〈岸边無き海に漂う〉ディアスポラがサハリン島でもある。これで一つのまとめとしよう。

二〇一〇年二月二〇日 自宅にて